

## 献体登録者の精神の健康についての一考察

—— 献体登録者の手記の分析より ——

赤星 誠\*<sup>1</sup> 中島 香織\*<sup>1</sup> 川元 裕子\*<sup>1</sup> 吉岡 洋治\*<sup>2</sup>

### 【抄 録】

献体登録者と身近に接する体験から、登録前後の心境の変化を精神の健康の観点からとらえ、精神保健行動を明らかにすることを思いついた。その第1歩として財団法人、日本篤志献体協会が発行している文集「私と献体」の第12集から第17集の6冊に掲載されている献体登録者の手記の中から、献体登録後に語られている内容を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 献体登録をして恐怖感がなくなり、心の安らぎが得られている。さらに生きる意欲につながり、お世話になった人達に感謝しながら死への準備ができるといった心境の変化がみられた。
- 2) 献体に至った動機として医学や社会、あるいはお世話になった医療職の人達のために役立ちたいとか、自分の死生観を形に表わしたかったといった内容がみられた。
- 3) 献体登録の決断によって、死に対する恐怖感がなくなり、死をあるがままに受け入れるといった自分自身の死生観が明確になっている。
- 4) 死後のボディイメージを身近にすることで、献体する以前に比べ、より健康に気をつけるようになり、教育機関を利用した学習や、社会への奉仕をしたいといった積極的な生き方へ認識が発展している。

【キーワード】 献体、精神保健、健康、死生観、人生観

### I 序論

#### A. はじめに

「献体」という言葉が使われはじめたのは、昭和41年頃であり、昭和49年頃から辞典類にその言葉がみられるようになった<sup>1)</sup>とされている。それまでは、まだ「献体」という言葉は使用されておらず、「遺体提供」、「死体をささげる」、「献ずる」あるいは「遺体献納」などの言葉が使用されていた。昭和58年に「医学および歯学の教育のための献体に関する法律」が制定され、その中の第2条で「献体の意思とは自己の身体を死後、医学又は歯学の教育として行われる身体の正常な構造を明らかにするための解剖体として提供することをいう<sup>2)</sup>」というような内容で条文化されている。即ち、献体登録とは、在命中より、死後の亡骸を医学や歯学の教育のために、あらかじめ予約しておくことを意味している。

献体登録者の数は、年々増加しており、全国的な規模で献体登録者の数の推移をみても、昭和52年度から平成6年度の17年の間に約7倍(図1)<sup>3)</sup>に増加している。最近では献体登録を希望しても、断わられるケースも出てきており、坂井は著書の中で、「献体がほぼ充足したという解剖学教室にとってありがたい状況は、実は献体団体にとっては大きな悩みになっています。何よりも、献体を社会に広めよう、献体登録者を増やそうという目標が、なくなってしまったからです。」<sup>4)</sup>と今後の献体運動の低迷に対する懸念さえ指摘している。

このように昨今の献体に関する状況は「医学及び歯学の教育のための献体に関する法律」が制定された頃に比べ大きく様変わりしている。

そのような状況の中で個人的な体験として、献体登録した後で、それまで家の中で閉じこもってばかりいたのに散歩を始めたり、人間ドックに行くよう

\*1 Makoto Akahoshi, Kaori Nakasima, Yuuko Kawamoto: 宮崎県立看護大学

\*2 Youji Yoshioka: 自治医科大学看護短期大学

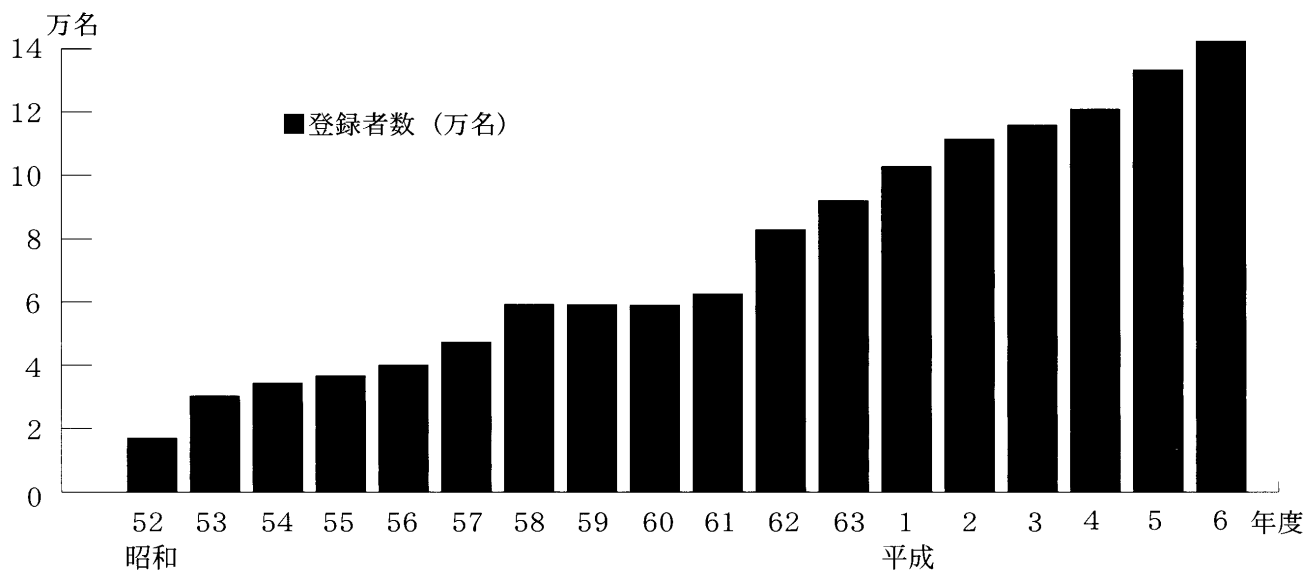


図1 全国の献体登録者数の推移

になったりと、急に身体を大事にするようになった近親者を見てきた。また筆者自身も登録した後、数日間の座禅修行の後にみられるような悟りの前段階ともいえる心的状況になり、極めて平穏な心を持つことができた体験がある。

今回、このような経験を通し、献体登録者の登録前後の心境の変化を精神の健康観の観点から捉え直してみる研究を思いついた。その第一歩として、財団法人・日本篤志献体協会が発行している「私と献体」の文献の中の登録者の文集<sup>5)~10)</sup>を分析したところ、登録者の病気や死に直面し、献体登録を申し出た後の心の動きを浮きぼりにすることができ、精神の健康の保持にとって有意義な示唆が得られたので報告したい。

## B. 研究目的

献体登録者の登録後の心境の変化に関連した精神保健行動を明らかにし、健康の意味について考察するための資料づくりとする。

## C. 主な用語の定義

献体登録者：自分の死後の亡骸を医学生の人体解剖学の材料となるように献体登録団体に申し出て、名前を登録している人

## II 対象と方法

### A. 研究対象

研究対象は財団法人・日本篤志献体協会発行の文集「私と献体」の第12集から第17集の6冊に掲載されていた209名の手記である。

### B. 研究方法

以下の2段階の方法で抽象化を進めていった

- ①第1段階の作業として上記の研究対象の文集を一つ一つの意味内容ごとにまとまりのあると思われるものを、カードに記入した。
- ②そのカードの共通性と相違性に着目し、同じ意味内容が記入してあれば、そのカードを一つのまとまりとして、一つのグループにした。
- ③そのグループの意味内容をよく表わしていると思える名称をつけた。
- ④第2段階の作業として③で名称をつけたものをさらにカードに記入した。
- ⑤そのカードを第1段階の作業で行った方法で共通性と相違性を考慮して、まとまりのあるグループを作った。
- ⑥そのグループの意味内容を的確に表わしていると思われる名称をつけた。

表1 分析結果

第2段階の分析	第1段階の分析
1. 献体登録をして認識できた心境の変化	①恐怖感がなくなった ②心の安らぎが得られた ③生きる意欲につながった ④お世話になった人達に感謝したい ⑤死への準備ができる
2. 献体を思いついた動機	①医学や社会のために役に立ちたい ②お世話になった医療職の人達の役に立ちたい ③自分の死生観を形に表わしたかった
3. 献体登録者の死生観	①死は怖くない ②死は自然の摂理 ③死後肉体は消滅するが魂は生き続ける ④過去の罪が献体により消え去り、天上界に昇天する
4. 献体登録者の生きがい・目標	①健康に気をつけた余生を送りたい ②学習や社会奉仕を生きがいとする ③献体の尊さを世に伝えていきたい ④解剖で使用予定の身体を傷つけないよう事故などにきをつけていたい ⑤親しい人達をあったかく見守っていきたい

### Ⅲ 結果

以上の分析による結果はまとめて表1に示す。この中で、抽象化するために用いた具体的なカードの代表的な具体例を示してみたい。

#### 1. 献体登録をして認識できた心境の変化

ここでは、「最初の恐怖感がなくなった。」「心の安らぎが得られた。」また、「生きる意欲につながった」あるいは「お世話になった人達に感謝したい」さらに「死への準備ができる」といった5つの内容にまとめられた。この中で、「恐怖感がなくなった。」という項目の中には、例えば〈死を具体的な状況のもとで想像することになれ、死ぬことの怖さがなくなった〉とか〈人生に対する迷いがなくなり、死ぬことが怖いといった感情が遠のいた〉というような内

容がみられた。

また次の「心の安らぎが得られた」という項目の中には例えば〈胸につかえていた何かが下がり心穏やかな日々を送っている〉というようなものがあった。

また次の「生きる意欲につながった」という項目では例えば〈憂きことの多い現世も、いろんな角度でみながら、ゆっくりと味わっていくことで明るい希望と生きがいを感じる〉といったものがみられた。

また次の「お世話になった人達に感謝したい」という項目には、例えば〈お世話をいただいた生前の恩返しが多量なりとはたせる。〉といったものがあった。

最後に「死への準備ができる」という項目では例えば〈人生の総仕上げができる〉と言ったものや、〈死後に対する一つの備えができる〉というものがあった。

## 2. 献体を思いついた動機

ここでは「医学や社会のために役に立ちたい」「お世話になった医療職の人達の役に立ちたい」また「自分の死生観を形に表わしたかった」という3つの項目にまとめられた。その中で最初の「医学や社会のために役に立ちたい」という項目では〈献体という形で少しでも役に立ちたい〉とか〈私のような者でも医学の進歩に役立ちたい〉といものがみられた。

次に「お世話になった医療職の人達の役に立ちたい」という項目では〈看護婦さんに助けてもらった。献体は私からの感謝の気持ち〉とか〈私のように医師のおかげで命ながらえている者にとっては最大の恩返し〉といものがあつた。

最後に「自分の死生観を形にあらわしたかった」という項目では〈17年前に夫が一年間の入院闘病後亡くなり、一層、自分の最後、よき死に方を考えるようになった。〉とか〈クリスチャンとして神に生かされている恵みを感謝の気持ちとして表わしたかった。〉といようなものがみられた。

## 3. 献体登録者の死生観

ここでは以下の4つの項目にまとめられた。最初は「死は怖くない」「死は自然の摂理」そして「死後、肉体は消滅するが、魂は生き続ける」最後に「過去の罪が献体により消え去り、天上界に昇天する」といふようになった。

最初の「死は怖くない」の項目では〈60代半ばを過ぎると、人間死に対する怯えはなくなる〉とか〈死ぬときが最高に華開くとき〉といふようなものがみられた。

次に「死は自然の摂理」という項目では〈人は必ず死があり、それは唯、早い遅いかの違いだけ〉といふものや〈死こそは天が我々人類を恵んだ摂理〉といふものがあつた。

また「死後肉体は消滅するが、魂は生き続ける」という項目では〈魂は死後に肉体を離れ、神の御国で永遠に生きる〉とか〈死は新しい次の世界のはじまり〉といふものがあつた。

最後に「過去の罪が献体により消え去り、天上界に昇天する」とまとめられた。ここでは〈献体でもろもろの罪が消えた〉とか〈死という人生の一大事をさらりと献体という行為にふりかえて悟りの天井

界に生まれ変わる。〉といふものがみられた。

## 4. 献体登録者の生きがいと目標

この項目では「健康に気をつけた余生をおくりたい」「学習や社会奉仕を生きがいとする」また「献体の尊さを世に伝えていきたい」さらに「解剖で使用予定の身体を傷つけないよう事故などに気をつけたい」「親しい人達をあつたかく見守っていきたい」といふ5つにまとめられた。

この中で最初の「健康に気をつけた余生をおくりたい」といふ項目には例えば〈成願の日まで健康の維持に努めたい〉とか〈与えられた寿命を美しく、精一杯老いてバタツといきたい〉といふようなものがみられた。

また次の「学習や社会奉仕を生きがいとする」といふ項目では〈放送大学で勉強したい〉〈生涯学習、趣味の会と楽しく生きていきたい〉といふものがあつた。

3番目の「献体の尊さを世に伝えていきたい」といふ項目では、〈献体は進んで提供できるような機運を醸し出したい〉とか〈献体の尊さを多くの人に伝えたい〉といふようなものがあつた。

4番目の「解剖で使用予定の身体を傷つけないよう事故などにきをつけたい」といふ項目では〈五体をもつまま後で役に立ちたい〉とか〈太らないよう、怪我で身体に傷つけないようにしたい〉といふものがあつた。

最後に5番目の「親しい人達をあつたかく見守っていきたい」といふ項目では〈愛する者達をあつたかく見守ってやりたい〉とか〈自分の死をみつめ、隣人を愛し、何をもって何を残していけるか学んでいきたい〉といふようなものがみられた。

## IV 考察

### A. 登録後の心境の変化による献体登録者の精神保健行動

表1の「1. 献体登録して認識できた心境の変化」の欄をみても、まず献体登録して恐怖感がなくなり、心の安定感が得られたといふ項目があげられている。このような精神状態になるのは宗教や思想といった、自己のよって立つ基盤が確固としたもの

として存在し、それを認識するときこのような心的状態になれる。献体登録という行為そのものが、ある種の神秘的体験であり、宗教性をおびた体験としてとらえることができるのかもしれない。さらに、このことに加えて、生きる意欲につながり、周囲への感謝の念をいだきながら、死への準備をするという、人の生き方としてある意味では理想的ともいえる抽出内容となっている。

そもそも、献体登録した人は生前から常に死後のボディイメージを認識しながら生きていくことになる。言葉を代えたとこのことは、死が生の中の位置付けられた生き方ということになる。西村は「本来、異常とされる不健康や病気によってこそ〈実存的〉な問いがなされた。病気を通じて〈己れ自身に関する反省〉〈世界全体の中での自己の位置づけ〉というものがある。」<sup>11)</sup>と述べている。このように病気になってはじめて、健康のことや死の問題、人の生き方についての思索が始まるが、献体登録をした場合もこれと同じような状況を呈することになる。献体登録者が健康者であれば、健康な状態のまま、実存的な問いかけ、己自身についての反省、世界全体の中での自己の位置付けをしていくことになる。即ち、実存的な問いかけの中で自己のアイデンティティを確認し生の意味を思索しつづけるというこのようなことが、献体登録者の精神保健行動の特徴の一つとしてあげられることになる。

## B. 献体登録者の生きがい・目標と健康観

表1の4番目に登録者の生きがい・目標があげられている。ここでは、登録したことにより、よりいっそう身体を傷つけないように健康に気を配って生きていきたいという願望と学習や社会奉仕を生きがいにしたいという積極的な生き方に認識が発展してきている。すなわち、無理をしないで、ある意味では惜しみつつ積極的に人生を楽しむというこのような考え方は既に、江戸時代の初期に貝原益軒の「養生訓」の中にみられる。立川は「養生訓」の中で「おしむ」とい言葉を「自分の命やからだを『いとおしむ』、つまり愛するという気持ちである。愛すればこそ、やたらに消費はしない。大事に大切に、おしみおしみ使えというのである。」<sup>12)</sup>と述べている。また同じく〈楽しむ〉という言葉で「ここでいう『楽

しむことは、もとより今風の享乐的な考えではない。健康で長命を保ち、人生を全うするということである。」<sup>13)</sup>と述べている。このように、約300年前の日本の学者が語った健康観の一部が献体登録者の登録後の生き方と重なることになる。

また、このような積極的な生き方は『ウエルネス』という概念とも通じるところがある。内堀は「世界保健機関（WHO）憲章の前文にWell-beingという言葉がでてくるが、これは完全な安寧の状態を指す言葉で、これがWellnessの語源である。ヘルスは病気の対語であり、病気でない状態を示しているのに対して、ウエルネスは、もっと精神的、社会的な側面も加味したより積極的な健康観を指している。」<sup>14)</sup>と述べている。このように献体登録者の登録後の生き方は、無理をしないで人生を楽しみ、かつ親しい人達を見守りながら交流を行い、献体を世に伝えていきたいとする自分の価値観の発揮というウエルネスが十分に発揮された状態であるといえる。さらにこのような生き方は「健康とは良い状態をさすだけでなく、我々がもてる力を十分に活用できている状態をさす」<sup>15)</sup>といったナイチンゲールの健康観とも関連してくる。つまり、その人がどのような状況におかれても、その人なりの潜在能力が十分に発揮できるような場があれば、そのことが『健康』である状態であるとしている。

このようなナイチンゲールの健康観とも交錯しながら献体登録者の生きがい・目標には、その人なりの『もてる力』の活用が強調されていると考えることができる。

## V おわりに

近親者と自らの献体登録の体験から、登録後の心境に登録前とは明らかに異なるものを感じ、その意味するものを探索することで、精神の健康の意味を捉えてみたいと思った。そのことで看護学上における健康の概念からも何らかの考察が可能になるのではという思いもふくらみ、今回はその基礎的な資料をつくることで、入手し得た文献の分析を試みた。文献にあらわれる人の認識は、読者の目を気にした認識であり、その人のダイナミックな全体像の全てが表出しているわけではない。そういう意味では今

回得られた資料は、献体登録者の断片的な一部分のデータである。

今後、研究の対象を献体登録者その人にスポットを当て、さらに、登録前後の心境と精神保健行動の変化との関連等について調査を行い、精神の健康の意味を探っていきたいと考える。

## 引用文献

- 1) 内野滋雄：わが国の献体の歩と献体登録者の心の変化, 15号, 160, 医学哲学医学倫理, 1997
- 2) くまもと白菊, 第18号, 62, 熊本白菊会, 1999
- 3) 前掲書1) : 164
- 4) 坂井建雄：人体解剖のすべて 解剖学への招待, 44, 日本実業出版, 1998
- 5) 私と献体, 第12集, (財)日本篤志献体協会, 1991
- 6) 私と献体, 第13集, (財)日本篤志献体協会, 1992
- 7) 私と献体, 第14集, (財)日本篤志献体協会, 1993
- 8) 私と献体, 第15集, (財)日本篤志献体協会, 1994
- 9) 私と献体, 第16集, (財)日本篤志献体協会, 1995
- 10) 私と献体, 第17集, (財)日本篤志献体協会, 1996
- 11) 西村秀樹：健康に対するアンチテーゼ ―病気・死の排除と社会統制―, 健康科学, 第20巻, 52, 1998
- 12) 立川昭二：養生訓の現代的意味 江戸の健康観, 体育の科学, 41巻, 844, 1998
- 13) 前掲書13) : 843
- 14) 内堀毅：ウエルネスの概念と企業福祉への展開, 4-5, 企業福祉, 1996
- 15) 金井一薫：ナイチンゲール看護論入門, 128, 現代社

# A Study about the Mental Health of Body Donators

— An Analysis of Body Donator's Note —

Makoto Akahoshi\*<sup>1</sup> Kaori Nakasima\*<sup>1</sup> Yuuko Kawamoto\*<sup>1</sup> Youji Yoshioka\*<sup>2</sup>

【Key Words】 Donator, Mental health, Health, A view of life and death, A view of life

---

\* 1 Miyazaki Prefectural Nursing University

\* 2 Jichi Medical School, School of Nursing